

t 仮導管: ごくまれに径約 12μ で重縁孔紋を有する仮導管を認める。

k₁, k₂ コルク皮: まれにコルク皮の破片を認めるが、主として表面視 (**k₁**) で多角形のコルク細胞からなり、まれに厚角細胞 (**co**) を伴った側面視 (**k₂**) を認める。

(6) **Powdered Cnidium.** Grey to pale dusky brown powder of *Cnidium* rhizome.

gst: masses of gelatinized starch, free from parenchyma. **vr, vs**: reticulate vessel and rarely spiral vessel, $15-30\mu$ in diameter.

vf: wood fiber, $20-30\mu$ in width. **f**: fragments of fiber bundle, $20-60\mu$ in width. **k₁, k₂**: fragments of cork layer, in surface view (**k₁**) and in lateral view (**k₂**). **p**: cortex parenchyma, containing masses of gelatinized starch. **m**: pith. **px**: xylem parenchyma. **mr**: medullary ray. **sf**: substitute fiber. **s**: sieve portion. **seo**: secretory cavity, with secretory cells, containing oil drops or masses. **c**: cambium.

(7) **Powdered Sophorae angustifoliae Radix.**

Grey to pale dusky yellow powder of *Sophora angustifolia* roots. **bf**: bast fiber, often accompanied by crystal fiber (**cf**). **fd**: bordered pit vessel, $30-80\mu$ in diameter. **vr**: reticulate vessel, $20-40\mu$ in diameter. **p**: cortex parenchyma, containing starch grains; rarely accompanied by crystal fiber (**cf'**) or crystal sand (**cd**). **wf**: wood fiber, rarely accompanied by crystal fiber. **sta**: single or 2 to 4-compound starch grains, $(3)-10-(30)\mu$ in diameter. **cr**: crystals of Ca-oxalate, $10-15\mu$ in diameter. **m**: pith. **wp**: wood parenchyma. **mr**: medullary ray cell. **s**: sieve portion. **vp, vs**: pitted or spiral vessel. **t**: tracheid.

○伊豆八丈島産イヌワラビ属の3種 (倉田悟・中村武久) Satoru KURATA & Takehisa NAKAMURA: Three *Athyrium* spp. from Hachijō Island.

伊豆七島のフロラにはその南国的な気候から期待される程南九州や琉球・台湾方面の植物は見られないが、胞子の遠方への散布が容易なシダ類には同性質のラン類等と共にかなり著しい南方分子が自生している⁽¹⁾⁽²⁾。しかし散在せる小島の集まりという環境に制限されて、伊豆・房総両半島に比してさへそのシダフロラは稍々貧弱である。特に伊豆の島々は開析火山島たる御蔵・利島の両島を除けば火山活動の歴史も新らしく、噴火による植生の破壊並に地形の単純化によつてシダの生活に適した環境が乏しいと思われる。而して噴火後年代を累ねるにつれ、シダの好む環境が形成され種類数を増加して行くのであろう。

昨夏中村は伊豆八丈島に従来未記録のホソバインヌワラビ、ヤマインヌワラビ、タニニス

ワラビのイヌワラビ属3種を採集した。この中前2種は伊豆七島としても新記録のものであり、而も面白い事に噴出の新らしい八丈富士の火口内に見出されたのみで、又従来伊豆七島では御蔵島にのみ報告のあつたヤワランシダの貧弱な株がやはり同所に採集された事も考え合せて、之等は八丈島シダフロラへの近來の侵入者としての意義を有しているものと思う。

一方タニイヌワラビは七島内ではかつて三宅島に僅かに採集されていたもので、昨夏は八丈島の八丈富士とは反対に地形の開析された三原山で採集された。三原山は噴出も古く溪流も発達してシダの生活に好環境を形成し、七島には珍らしいスジヒトツバ・ユノミネシダ・オオカナワラビの外、他の島に見られぬイヌタマシダ・アツイタ・イワヤナギシダ等も自生している。三原山に生育するシダは古くから八丈島シダフロラのメンバーとして自生していた種類も多いと思うが、タニイヌワラビは海拔 500 m の既に溪流を外れた叢林下に概して發育の悪い株を見出したのみであるから、或は前2種同様の新滲者かも知れない。

以上従来1種類も無かつたイヌワラビ属のシダが3種類も八丈島のシダフロラに追加された事を報じ、合せてその分布由来を考察して見た。

- 文 献 (1) 倉田悟：伊豆七島の植物地理雜考 (野草 No. 151, 153, 154. 1952 年)
(2) 倉田悟：伊豆三宅島の羊歯と島民 (日本シダの会々報 No. 2. 1952 年)

In the summer of 1952, three fern species belonging to genus *Athyrium* were collected in Hachijō Island. Among them, *Athyrium iseanum* Rosenstock and *A. Vidalii* Nakai have never been reported from the Izu Archipelago including Hachijō Island, while, in this archipelago, the other *Athyrium otophorum* Koidzu. was only once found by Mr. Kurihara in Miyake Island about fifteen years ago. It is remarkable that in Hachijō Island *Athyrium iseanum* and *A. Vidalii* were found only in the crater-basin of Mt. Hachijō-fuji of rather recent eruption. This fact tells the spores of these ferns were disseminated to this island from the Izu or Bōsō Peninsula or western Japan by wind in recent years. However, it is probable that these two ferns have grown wild since more ancient times in Mikura Island situated between Hachijō and Miyake Islands and that they were disseminated to Hachijō from this island, although these ferns have not been collected in Mikura Island because of the insufficiency of our botanizing there. For, Mikura Island, being smaller than Hachijō or Miyake Island in area, is an old volcanic one and its deep valleys give many suitable habitats for various ferns such as *Asplenium prolongatum* Hooker, *Colysis elliptica* Ching, *Diplazium Mettenianum* C. Chr., *Loxogramme graminoides*

C. Chr., *Crypsinus Engler* Copel. etc., which have scarcely been found in the other islands of this archipelago.

〇天城シダ (倉田 悟) Satoru KURATA: Oldest record of *Asplenium Wrightii* Eaton from Izu.

伊豆天城山は本当にシダの採集地として絶好の所である。東京附近で天城山に行かなければ自生に接し得ない暖地性のシダが 2・30 種もあろう。その中にはジョウレンシダ (一名ハイコモチシダ) の如く本州では他に求むべくもないものや、ヒトツバイワヒトデ・ホホノカワシダ・ミゾシダモドキ・イヨクジャク・コクモウクジャク・オトコシダ等の珍品も数えられる。しかもまだまだ今後の探索に待つ所も大きいといった状態である。

斯様なシダの樂園として有数の天城山であるのに、この天城の名を和名に冠したシダのない事は特に伊豆のフロラに愛着を持つ筆者にとつては何となく寂しかった。しかるに無いと思っていたのは筆者の無学の到す所で、ちゃんと「天城シダ」というれつきとした和名を持つシダがある事を知りすつかり嬉しくなつてしまった。越中富山の殿様前田利保の著した本草通串證図 (1853) 巻五にこのアマギシダは図示されているが、恐らくこの著により公けにされた和名であらう。この和名は其後は省みる者も無く忘れられたものらしい。さてそれではアマギシダとは一体何であるか。この本草通串證図の図は本草図譜等に比べればずつと真に逼つたものが画けて居り、このアマギシダがクルマシダである事はその図を見れば誰方も納得して頂けると思う。余り发育の良くない葉が 3 枚、葉軸や葉柄に葉肉が翼状に沿着し、葉柄には細長い鱗片が密に画かれ、説明文は唯「豆州那賀郡天城山に産するもの」とあるのみだが、近似のシダとは充分に区別出来る図である。

一方、クルマシダという和名は何時誰が名付けたのか良く知らぬが、Franchet. et Savatier の目録 (1876) にもその学名のみで和名は記されていないし田中芳男先生の羊歯分科名彙 (1871) にもその名は見えない。又松村任三先生編輯日本植物名彙初版 (1884) にも本羊歯は全く載っていないが、理科大学植物標本目録 (1886) には日向高鍋に産するとしてクルマシダの和名が始めて眼に着く。

伊豆はクルマシダの東北限産地で半島内の何處にでもあるという訳ではなく、明治 24 年 (1891) に堀・池野両氏が伊豆産を記録されて以後一向に採集の報告もなく、戦後になつて南伊豆の植物調査が進むにつれ、蜂屋・小村両氏 (1948) により仁科村白川考証林に多産する事が発見されたのを手始めに、城東村・宇久須村・上河津村と広く自生地が判明し (林彌栄氏は昭和の始めに蓮合寺で採集された由)、最近では北伊豆の戸田村雉ヶ尾滝にも見出されるに到つた。本草通串證図の説明文にある那賀郡天城山とは当時伊豆は 4 郡に分れ、現在の賀茂郡の西北部が那賀郡となつていたので、恐らく仁科村か中川村方面の西南天城を指すものであらう。